

小児科診療 UP-to-DATE

2014年5月7日放送

海外渡航小児 医療の現状と課題

前・トヨタ記念病院 小児科・新生児科
部長 岡田 純一

1. 子どもの海外渡航の現状と小児科医の役割

近年、海外へ出かける子どもが増えてきました。法務省の出入国管理統計データによりますと、2012年の1年間に出国した日本人のうち20歳未満は150万人、15歳未満だけでも94万人に上り、いずれも史上最多を更新しています。その多くは短期旅行ですが、長期滞在型の子どもの海外渡航も増えてきております。外務省の小中学生の長期滞在者統計と、6ヶ月以上海外に滞在して帰国した乳幼児の数を合計しますと、約10万人を数えます。つまり、子どもの海外渡航者は年間約100万人、長期滞在者は約10万人の時代になったと言えます。

このように、多くの子どもが海外渡航をするようになると、それに関する医療の必要性が高まり、トラベルクリニックなどの特定の医療機関だけでなく、一般小児診療の中にもそれが求められるようになってきました。

海外渡航の子どもに対する医療支援の中で、医師に期待されている役割の一つが渡航前の予防接種ですが、その他にも帰国後の子どものプライマリ・ケアや海外生活における医療健康相談なども、小児科医が専門性を発揮できる分野です。

2. 子どもの海外渡航と健康リスク

海外渡航をする子どもの健康リスクについて考えてみます。海外へ出かける場合には、国内で暮らすのとは別の健康リスクがあり、その代表が感染症です。これは渡航先、旅行形態、滞在期間や

図1 出国日本人数の推移 (1964~2012年)

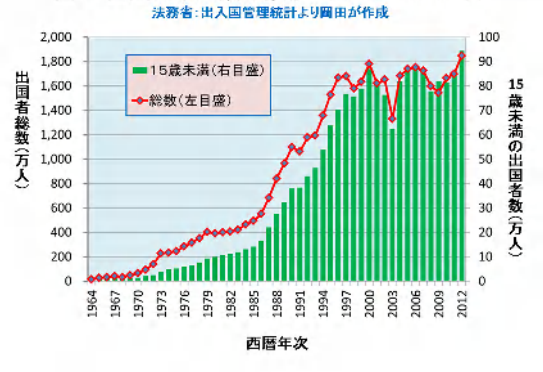
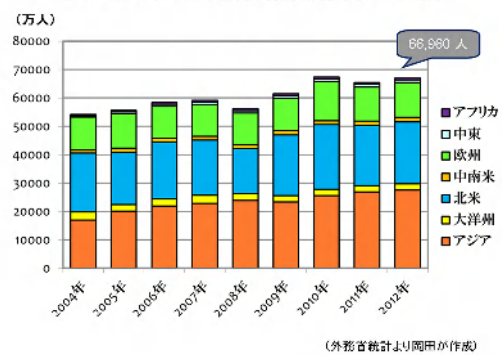


図2 在留邦人(学齢期)長期滞在子女数



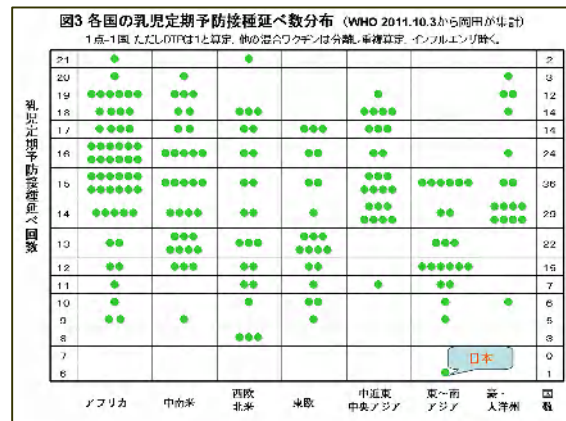
季節などによって大きく左右されます。熱帯地域への渡航では、マラリアやデング熱などのいわゆる熱帯感染症、衛生環境が不要な地域では腸チフスやA型肝炎など主に経口感染症が問題になります。都市部よりも地方への旅行で、また滞在期間が長いほど感染症のリスクは高まります。地域によっては狂犬病も重要です。狂犬病が常在せずその怖さも対処法も知らない日本からの渡航者には、正しい知識と予防法に関する情報を提供する必要があります。

もう一つは、衛生環境や医療供給体制などの健康インフラの未整備によるリスクです。医療機関へのフリーアクセスに馴染んでいる日本人にとって、医療機関へのかかり方も戸惑うことの一つです。

3. 海外渡航小児に対する予防接種

次に、海外へ行く子どもへの医療支援として重要な渡航前の予防接種についてお話します。短期旅行の子どもへの予防接種は、渡航先のリスクに応じたA型肝炎などのいわゆるトラベラーズワクチンの接種が主体であり、比較的単純です。ここでは長期滞在型の子どもへの予防接種に焦点を絞ってお話します。

これまでの日本の定期予防接種は長らく極めて手薄でした。そのために、海外へ出かける2~3歳以上の子どもは、きちんと日本の定期予防接種を受けていても、国際標準には達していない場合がほとんどです。2011年時点でのわが国の乳児の定期予防接種は、BCG 1回、DPT3回、経口ポリオワクチン2回の、合わせて3種類、延べ合計で6回のみであり、いずれも世界最少でした。このような事情もあり、海外渡航前の子どもに接種しておきたい予防接種の種類と回数は少なくありません。しかも渡航前に許される期間は限られています。これを効率よく進めるためには、最初の段階で出国までの接種計画を立てることが最も重要です。それには、年齢、予防接種歴、既往感染歴などに加えて、渡航先の予防接種制度、感染症リスク、渡航までの期間など、多くの要素に配慮しなければならず、初診時にこれをすべて行うことは容易ではありません。できれば予約段階であらかじめ必要な情報を得ておき、接種スケジュールを準備した上で初診時を迎えたいものです。



予防接種計画を立てるための一般的な考え方についてお話します。まず、接種したいワクチンの種類と回数とリストアップすることから始めますが、それには必要ワクチンは優先度を加味したカテゴリーに分けて考えるとわかり易いと思います。長期滞在型の渡航者については、このカテゴリー分類はほぼ優先度と一致すると考えてよいでしょう。短期旅行者に対しては検疫ワクチンと、いわゆるトラベラーズワクチンが中心となります。

カテゴリー1は、検疫ワクチンです。

入国の条件として必要とされるワクチンであり、一部の熱帯地域の国への黄熱ワクチンがその代表です。黄熱ワクチンは検疫所などの特定の施設でしか接種できませんが、接種計画作成時にはこれを受けるための日程に配慮する必要があります。カテゴリー2は、いわゆるトラベラーズワクチン

表1 海外へ出かける子どもに対する予防接種の種類(私案)

ワクチンのカテゴリー	補足説明	具体例
1 検疫ワクチン	入国(検疫)のために必要とされるワクチン	黄熱流行国への入国者に対する黄熱ワクチン
2 いわゆるトラベラーズワクチン	渡航先環境下で個人を守るワクチン	A型肝炎、腸チフス、狂犬病、髄膜炎菌ワクチンなど
3 渡航先の定期接種	渡航先で定期接種とされているワクチン	多くの国へのムンプスワクチン、米国への水痘ワクチン
4 日本の定期接種	日本国内定期接種のカバー	国内定期接種分のうち年齢相当未接種分
5 WHOの定期接種推奨ワクチン	その他の国際的標準ワクチン	B型肝炎、ロタウイルスワクチンなど

です。

海外へ渡航することによってリスクの高まる感染症の予防に用いられるワクチンであり、狂犬病、A型肝炎、腸チフス、髄膜炎菌、ダニ脳炎などに対するワクチンがこれに当たります。

カテゴリー3は、渡航先の定期接種ワクチンです。

渡航先の国の定期予防接種制度から見て、ワクチンの種類や回数で不足しているものもできる限り接種を行いたいものです。わが国の定期予防接種が、国際標準から見て手薄であったことから、このカテゴリーに該当するものは少なくありません。特にアメリカへ行く場合には、入園や入学に際して現地の要求を満たしているかどうかチェックされます。このカテゴリーのワクチンの種類と回数を判断するためには、渡航先の国の予防接種制度を知る必要があります。WHO世界保健機関のウェブサイトで、加盟国の情報を参照することができますが、その一部の国について日本語化して紹介している日本小児科医会国際部のホームページの情報が有用です。

カテゴリー4は、国内定期接種ワクチンです。

わが国の定期予防接種のうち、未接種分は完了させておきたいのは当然ですが、海外渡航により定期接種の機会を失う恐れのあるワクチンのカバーにも配慮する必要があります。

カテゴリー5は、WHOが定期接種化を勧告しているワクチンです。

現在10種類あります。この中にはまだ日本では定期接種化されていないワクチンもあります。日程的に可能であれば、これらの接種も望めます。

(予防接種の進め方と英文予防接種証明書持参の重要性)

このようにしてリストアップした接種予定ワクチンについて、できる限り同時接種を取り入れて、出国までの接種計画を立てます。予定された接種を終了すれば、それまでに受けたすべての予防接種の種類と日付を記した英文の予防接種証明書を作成して持たせることが重要です。これは入学などに際して提出が必要な国があるばかりではなく、渡航後の継続予防接種の相談や受診時に大いに役立ちます。

表2 すべてのひとに推奨する予防接種(10種)
(WHO: Vaccine Position Papers; 3.Feb.2012.より引用が作成)

ワクチンの系	回数	小児期	思春期	成人期	定期接種としての追加的勧告時期
BCG	1回				EPI
B型肝炎	3~4回	DTPと同時に	3回(末接種のハイリスク層)		2004年
ポリオ	3回	DTPと同時に			EPI
DTP	3回	ブースター (DTP) 1~6歳	ブースター (Td)	ブースター (Td)	EPI
Hib	3回	DTPと同時に			2006年
肺炎球菌 (結合型)	1	3回	DTPと同時に		
	2	6ヶ月まで2回、9~15か月追加			2007年
ロタウイルス	Rotarix 2回 RotaTeq 3回	DTPと同時に			2010年
麻疹	2回				EPI
風疹	1回		1回(思春期、妊娠:末接種済)		2011年
HPV(頸がん)			3回(女子)		2009年

4. 海外帰りの子どもの診療の課題

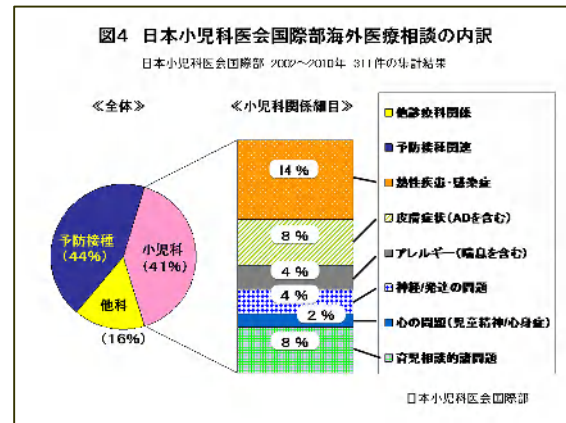
さて、子どもの海外渡航者が年間100万人ということは、ほぼ同数の子どもが海外から帰ってくることも意味しています。その中には熱帯感染症など国内では通常見られない疾患や、現在は国内では流行していない感染症を持ち帰る場合も少なくありません。今回は時間の関係でこの問題については詳しくお話することはできませんが、小児科医を含めた医療従事者は常にこのことを念頭に置いて日常の診療に当たることが求められます、また、頻度の少ない熱帯感染症などの診療に中心的な役割を果たすことのできる拠点医療機関のネットワークの構築も今後の課題の一つです。

5. 海外医療相談から見えてくるもの

日本小児科医会国際部ではホームページで海外の日本人の子どもに関する医療健康相談を行っています。相談内容で最も多いのは予防接種に関するもので、日本の予防接種制度が国際標準的でなかったことによると思われる。その他さまざまな健康問題の相談がありますが、海外特有の問題よりも一般的な内容が多く、ここにも海外渡航の子どもに対する一般小児科的な支援の重

要性が表れていると思います。

私たちは、海外へ出かける多くの子どもたちの健康を願い、普段からこの問題に関心を持って情報の収集に当たり、専門家として支援をしていきたいものです。



「小児科診療 UP-to-DATE」

<http://medical.radionikkei.jp/uptodate/>